

月刊『カーサ ブルータス』
Life Design Magazine

「布」がインテリアの主役です!

BRUTUS®

Casa

12

2017 vol.213
DECEMBER
¥980

ラグ、リネン、 テキスタイル

RUG, LINEN... & TEXTILE

安藤忠雄の「建築」と「挑戦」



5.

アダム・ポグ作の
《ステンドグラス・カーテン》

6.

COMMUNEの
日本の裂織りのクッション

1 《ADAM POGUE FOR COMMUNE》というラインで布作家アダム・ポグとコラボレートして作った寝室のカーテン。以前使っていた日本の暖簾を再生させた。2 1930年代頃のラグ。「ナバホのラグはグラフィック的にもモダンで素晴らしい」とロマンさん。3 《COMMUNE》のリンネを《Small Trade Co.》が染めたコラボレーション。4 《COMMUNE》のプロダクト、キリムを再生したクッションはベッドに置いて。5 壁のアートやポスターを西日から守りつつ、フィルターのように陽光を透過する美しいカーテン。6 日本で見つけた裂織りを使った《COMMUNE》のオリジナルクッション。7 敬愛するトニー・デュケットの遺品オークションで手に入れたラグ、思い入れのある品と暮らす。

トニー・デュケットが持っていた
1900年代初頭のインド製ラグ



4.

COMMUNEの
ヴィンテージキリムのクッション



1.

アダム・ポグ作の
キルトの遮光カーテン

2.

ナバホ族の
ヴィンテージラグ

3.

COMMUNE × Small Trade Co.の
藍染めリネンのスロー

ROMAN ALONSO

(COMMUNE)デザイナー

フィーリングの演出には ファブリックが欠かせない。

デザイナーズものだけの空間には興味がない、と言い切るロマンさんの自宅にはファブリック使いのヒントがたくさん。「触り心地重視」という部屋のディテールを検証してみる。

photo & text_Aya Muto

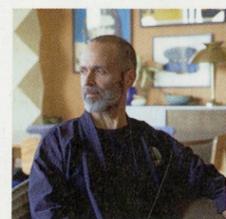


左上/日本で見つけるという買ってしまおうという刺し子の布は、見せたいオブジェの下に敷いて。左下/《Small Trade Co.》×ヤネ・アレクシスの編み込みバスケットに靴下を見せて収納。右/フリースの端切れが詰まった《dosa》のレザークッションも。

70

年代に建てられたコンクリート建築の集合住宅にロマンさんが住居を移したのは昨年のこと。リノベーションに6か月をかけてようやくキッチンとバスルームが仕上がったという。「仕事の性質上、年の半分は旅先。だから家で過ごす時間には心からのくつろぎを求めます。ファブリックはそのフィリングの大きな立役者なんです。玄関から入ってまず目に飛び込んでくるのが中央に置かれたピンク、オレンジ、赤と色鮮やかなラグ。「これは敬愛するアーティスト、トニー・デュケットのエステートオークションで手に入れた、1900年代初頭のインド製のもの。布という儂いマテリアルのように思いがちだけれど、実は時代を超えて人々の生活の中に残り

得る、機能的な素材なんです」。昔から布が好きでつつい集めてしまったそうだが、思い入れのあるラグだからといってしまいいむのではなく、積極的に使うというのがロマンさんの哲学だ。「布にはどれも物語があるから、手に入れるのが楽しいですね。誰が作ったのか、どの文化から生まれた技術を使っているか、いつの時代のものなのか。《コミュニティ》の空間づくりでも、柔らかさを演出したり、防音のためにも重要なのがファブリック使い。僕らのデザイン言語に欠かせないマテリアルで、触ったり座ったり寝をべったりと、暮らしを受け止めてくれる担い手です。リメイクすれば、新しい美学や機能で新たな命が吹き込まれるのも、布の大きな魅力と可能性だと思っています」



ロマン・アロンソ

デザイナー。9月に《COMMUNE》が手がけた、ミース・ファン・デル・ローエの作風にインスパイアされたというACE HOTEL CHICAGOがオープンしたばかり。店舗や住居の内装からグラフィックデザインまで幅広く活躍中。http://www.communedesign.com